

クラーク室内管弦楽団 第24回演奏会

“真夏の宵は、ドイツ・ロマン派音楽を”

2011年8月10日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

R.A. シューマン(1810-1856) :

「序曲、スケルツォとフィナーレ」 Op.52 より

J.ブラームス(1833-1897) :

ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op.77

W.A.モーツァルト (1756-1791) :

「アヴェ・ヴェルム・コルプス」ニ長調 K.618

ヴァイオリン独奏：大久保 留加

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595 (工学研究院・下川部雅英)

プログラム・ノート

本日1曲目は、シューマンの「作品52」とされる「序曲、スケルツォとフィナーレ」から、「**序曲**」「**スケルツォ**」を演奏します。シューマンはもともとこの曲を交響曲として着想し、交響曲第2番とする予定であったといわれています。しかし、最終的には、交響曲に必要とされる緩徐楽章を加えることができず、現在の形に落ち着きました。名前は「シンフォネッテ」（小交響曲？）と呼ばれていたようです。彼の4つの交響曲に比べるとやや見劣りがするかもしれませんが、それでもシューマンの高い才能を感じさせる緊張感や華やかさを備えた素敵な作品です。

クラ管の第21回演奏会で、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を独奏した、北大出身の歯科医、大久保留加さんをソリストに、今回はブラームスの**ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op.77**に挑戦します。1878年、ブラームスが45歳の円熟期の作品で、大変完成度が高く、練習を重ねるごとに味わいが出てくるのを実感しております。作曲の経緯は、前年にブルッフのヴァイオリン協奏曲を聴いたブラームスが、大いに感銘を受ける一方、技巧に走る傾向にあり音楽的な深み・内容に欠けるのではないかと思ったのがきっかけだといわれています。友人でヴァイオリンの名手であったヨーゼフ・ヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮によってライプツィヒ・ゲバントハウスで行われた初演は（ブラームスの当初の不安をよそに）大成功。ブラームスのこの作品を聴いたシベリウスが、ショックを受けて自作のヴァイオリン協奏曲を全面改訂したほどだそうです（一方、チャイコフスキーは、この曲を酷評する手紙をメック夫人書いています）。作曲の経緯の中で、ヨアヒムとブラームスは頻りに意見交換を行っていたようです。本日演奏の第1楽章のカデンツァもヨアヒムの手によるものです。第2楽章のオーボエのソロはブラームスの作品の中でも傑出した美しさを持っています（楽譜を送られたサラサーテが、この曲の演奏を拒んだ理由に、美しいオーボエのソロを聞きながらソロヴァイオリニストが黙ってたっているのは耐えられない、といったとか。）

この曲には、特に表題がついているわけではなく、いわゆるしっかりした形式音楽なのですが、今回は第2楽章を鎮魂曲のイメージで演奏してみたいと考えています。

本日は、最後にモーツァルト最晩年のモテット「**アベ・ヴェルム・コルプス**」ニ長調 **K.618** を演奏します。モーツァルトが自分の健康問題も含めたさまざまな生活苦の中で（死の半年ほど前）書いたとは思えないほど、純度の高い名曲です。今回は最初に北大が誇るクラーク会館のパイプオルガンで、ついで管楽器とピアノを加えた特別編曲でお届けします。ピアノは今年8月2日に購入したばかりの新品です。本日がお披露目の会となります。

さて、前回の私たちの演奏会は、3月11日でした。ことの重大さを認識せぬまま予定通り演奏会を行いました。今回は震災の慰霊と復興応援の意味を込めた演奏会にしたいと考えております。震災の影響で直接間接の影響を受けておられる方々が多くいる中、アマチュアとして音楽活動をする意味をあらためて考えさせられておりますが、私たちは、音楽の力を、そして音楽を聴きたい、演奏したい、という人の心の豊かさが社会の力になることを、信じたいと思います。

（奥 聡）